

未婚で妊娠した若年女性の選択

- 「結婚期間が妊娠期間より短い出生」をした女性へのインタビュー調査をもとに -

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
家族機能・社会臨床クラスター
一丸 今日子

2005年度厚生労働省「出生に関する統計(人工動態特殊報告)」によると、「結婚期間が妊娠期間より短い出生」は2004年で26.7%であり、1980年の12.6%より毎年増加傾向にあり、10代後半から20代前半の若い世代ほどその割合が高い傾向にある。この調査が意味することは、現在日本において、未婚時に妊娠した若年女性の大多数は、中絶やシングルマザー、事実婚という形態を選択せずに妊娠後結婚することを選択しているということである。

「結婚期間が妊娠期間より短い出生」は俗に「できちゃった結婚」と呼称されているが、社会が持つ「できちゃった結婚」へのイメージは千差万別であり、「できちゃった結婚」を根拠のないまま否定している論文も多く見られたことから、「できちゃった結婚」の是非を問うのではなく、その内実を適切に理解することが必要だと考えた。

そこで、10代後半から20代前半で「できちゃった結婚」をし、かつ研究への同意を得られた5人の女性に、倫理的配慮のもと妊娠までの性関係の持ち方や考え方、妊娠受容について、結婚選択について、出産選択の理由、パートナーや周囲の反応、「できちゃった結婚」についての考え方、を主な質問項目にし、インタビュー調査を実施した。

その結果、未婚で妊娠した10代後半から20代前半の多くの女性が選択している、いわゆる「できちゃった結婚」の内実として明らかになったことは、「できちゃった結婚」の多くは「望まない妊娠」ではないこと、「できちゃった結婚」には「あいまいな戦略」という「妊娠することに対して自ら直接的にパートナーに働きかけることはないが、妊娠するかも知れないことを予測した上で、もし妊娠した時にどうするか、またパートナーはどうするだろうかということも視野に入れた、無計画ではない非・避妊行動」が存在する可能性があること、避妊をしていないにもかかわらず妊娠しない女性の多くは、自分は不妊なのではないかという「妊娠しないことへの不安」を感じていること、「できちゃった結婚」をする背景には毎回避妊を実行していたにもかかわらず妊娠する、「想定外の妊娠」もあり得ること、日本社会では婚姻制度が重視されており、「できちゃった結婚」をする当事者の多くには伝統的な家族観が存在すること、またそのために「できちゃった結婚」における出産と結婚の選択は連動していること、再就職をすることが、妊娠後生活が一変したことで蓄積されるストレスを軽減させ、新たな生活の幕開けとなりうること、であった。

なお、本研究におけるインタビューイーは5名であり、インタビューの考察に限界があった。当事者理解をさらに深めるために、より多くの当事者への調査が求められる。